

全世界注視のなかで、ニクソン大統領一行はついに北京へ乗り込んだ。念願かなった喜びと
いうのか、リラックス・ムードというのか、見
方によってはどことなく無気味にさえ感じられ
る笑顔で、ニクソン大統領は北京空港に降り立
った。一方、彼を運えた周恩来総理に、いつも
のような余裕が感じられず、張りつめたような
緊張ぶりだったのが印象的だったが、それもつ
かの間で、初日から、禁断の地・「中南海」の
毛主席宅で、毛・尼会談がおこなわれるという

改めて想起したというし、われわれにとつては
戦争にまつわる話題のカン詰めのようなグアム
島を経由して北京へ行った。北京はニクソン大
統領を運えたその日にも、日本の「アジア再侵
略」を再び激しく非難しているのである。
このようなとき、わが国はどうであろうか。
流動する国際関係を全面的に分析し論じあつた
上での防衛論争ではなく、**■**次防をめぐる予算
編成の「帳簿上のこと」で国会は空転し、他方
では、毛沢東軍事思想を歴史の脈絡を全く媒介

●外交時評

日本外交の変化と転進

中嶋領雄 (東京外語大学助教授)



予想もしない進展をみせ、米中両首脳陣の和気
あいあいの様子がテレビに映し出された。それ
にしても、ニクソン大統領を乗せた要人専用車
が天安門前を異例のフルスピードで走り過ぎて
いったことは、今回の首脳会談の秘密性と同時
に重大性をなにか暗示しているように思われる
いずれにせよ、会談の結果は今後の国際政治
にはかり知れぬ影響を与えるだけに、われわれ
としても安閑としてはおれない。しかもニクソ
ン大統領は訪中途中、ハワイで真珠湾のことを

せずに盲信した連合赤軍が軽井沢で機動隊と対
峙している。いずれもなんと空々しいことか。
もつとも、そうしたわが国の現実の中で救い
になる最近の動きは、霞が関外交が長い停滞と
惰眠のすえ、ようやく独自の構想のもとで始動
し始めたことである。私自身、一年半外務省特
別研究員として香港に在勤した体験をふまえ、
これまでの霞が関外交の体質にしばしば苦言を
呈してきたが、過去一年間の日本外交への鋭し
い風当たりを経て、わが外務省もようやく新た

な転進を求めつつあるように思われる。最近の
グロムイコ訪日を契機とする日ソ関係の新しい
展開については前回この欄でもふれたが、二月
にはいつての三宅南東アジア第一課長らのハノ
イ訪問による北ベトナムとの交流への着手、モ
ンゴルとの国交樹立宣言、通産省幹部の北朝鮮
代表との非公式接触などは、予想されたバンク
ラデシュ承認とともに日本外交の着実な転進を
示すものとして大いに注目されねばならない。
私は昨年来、将来の日中交渉にそなえて、日
中関係の長期的安定が必要であればあるほどこ
うした迂回的外交戦略を展開すべきことを主
張し、ある新聞にも「当面、北ベトナム、北朝
鮮、モンゴル、東欧諸国との関係も日ソ関係の
新展開とともに、重要な課題として考えてゆく
べきであろう。これはお互いに大きな『保険』
をかけあつて展開される米・中・ソ外交に見習
えということでは決してなく、日本は自己の地
位を冷静に見つめ、このような小さな『保険』
をかける多元的な群外交を展開すべきことを意
味しており、そうした背景のなかで、来たるべき
日中交渉に臨むべきであろう」と書いた。日本
外交のポジシオンを柔軟化させ、その選択肢を
拡大することは、中国外交の体質とその対日政
策の将来を考えたとき、日中関係の正当な発展
のためにも、長期的には決してマイナスではな
い。日本外交の変化と転進を数歩前進として評
価し、その将来を注目してゆかねばならない。